

気象観測機器コンテストで手に入れた成長と自信



鳥羽商船高等専門学校出身
山田さん（同校専攻科進学）

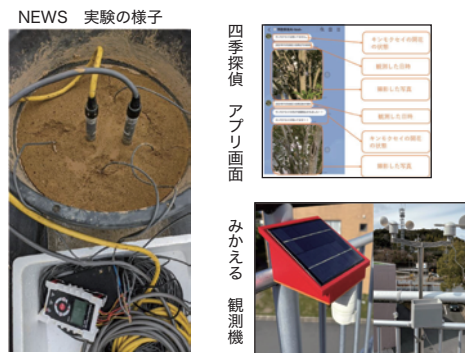
今回は、鳥羽商船高等専門学校の卒業生山田さんにインタビューを行いました。山田さんは高専時代に3回のコンテスト出場し、現在は専攻科で学びながら、システム開発者を目指しています。当コンテストを通じてどのような経験ができ、どのように成長できるのか、先輩のリアルな声をお届けします。

ゼロ「何も分からない」からのスタートで作った多彩な作品

山田さんが初めてコンテストに参加したのは、高専1年生の時でした。研究室の先生から手伝いを頼まれたのがきっかけで、最初は顔合わせもせず「何も分からない状態」からのスタートだったそうです。通算3回の出場を通して、面白くて実用的なアイデアを次々と形にしていきました。

作品

- 第10回 佐々木嘉和賞受賞作品（2021年）
「四季探偵 AI-アイ- ～レンズ越しの植物観察～」
- 第12回 佐々木嘉和賞受賞作品（2023年）
「LPWAを用いた環境情報取得システム
New Environmental Warning System「NEWS」」
- 第14回 優秀賞受賞作品（2025年）
「みかえる ～みかん栽培を変える～」



成長「ただの作業」から「プロジェクトリーダー」への成長

3回の参加で一番大きく変わったのは、チーム内での自分の「役割」だそうです。初回は言われたことをやるだけでしたが、2回目は先輩から技術を教わり、3回目は自らプロジェクトリーダーとしてチームを引っ張る立場へと成長しました。

リーダーを経験したことで、ただ言われた作業をするのではなく、作品の「意味」や「目的」を深く理解できるようになったそうです。また、パーツの作成から工程管理まで、プロジェクト全体をマネジメントする難しさと面白さを学んだことは、将来仕事をする上でも非常に役立つ大きな糧となるでしょう。

自信

アメリカでの悔しい経験が「揺るぎない自信」に

第12回で受賞した佐々木嘉和賞で副賞のアメリカ研修旅行に行くことができました。研修旅行では、受賞作品についてオクラホマ大学で発表します。綿密な準備と練習を重ねたにもかかわらず、緊張のあまり一時的に頭が真っ白になってしまうという、とても悔しい思いをしたそうです。しかし、その悔しさをバネにして「次からは徹底的に準備をする」と決心し、それ以来はどんな場でも自信を持って発表できるようになったと語っています。

※第10回はコロナ禍のためアメリカ研修旅行は実施されませんでした。



アメリカ研修旅行：発表の様子



第14回優秀賞：受賞時の様子

山田さんが語る

このコンテストのココがすごい！

実際に参加して感じた、この気象観測機器コンテストならではの魅力をご紹介します。

ポスターセッション形式で成長できる

自分の作品を発表するだけでなく、他の参加者の作品を見る時間や、審査員と直接話す機会があります。これにより、自分の作品を客観的に見直してブラッシュアップできます。

会場が船の上！？

会場が南極観測船（千葉県船橋港係留）の船上だったり、そこに宿泊できたりと、非日常的でとても新鮮な体験ができます。

助成金で本格的な作品が製作できる

他のコンテストにはなかなかない「製作助成金」が支給されます。これを活用してRaspberry Pi（小型コンピューター）などの研究機材を購入し、製作に打ち込んだそうです。優秀な成績を収めると、賞金や副賞として研修旅行を体験できることもあり、製作の励みになったそうです。

これから参加する高専生・高校生の皆さんへ

山田さんはこれらの経験を活かし、将来はシステム系の企業で活躍することを目標にしています。気象観測機器コンテストは、単に機械を作る技術力だけでなく、チームワークやマネジメント力、そして何より「自信」を与えてくれる素晴らしい挑戦の場です。これから参加する皆さんも、最初は分からないことだらけで当たり前です。失敗を恐れずに全力でコンテストを楽しんで、自分たちだけの素晴らしい作品を作り上げてください！